うつぼ物語より（二）

関根慶子

五、天より奇瑞あらわれて、俊蔭、琴三十を得る。

阿修羅いやますますに怒りて曰く、「汝が累代の命をとどめんとてもこの木一寸をうべからず。その故は、世の父母仏になり給ひし日、天稚御子くだりまして、三年掘れる谷に、天女くだり音声楽をして植ゑし木なり。さてすなはち天女のたまはく『この木は、阿修羅の萬劫の罪なかばすぎむ世に、山より西にさしたる枝枯れむものぞ。そのときに倒して、三分にわかちて、かみのしなをば三宝よりはじめたてまつりて忉利天までにおよぼさむ。中のしなをばさきの親に報い、しものしなをば行末の子どもに報いむ』とのたまひし木なり。阿修羅を山守となされて、春は花園、秋はもみぢの林に天女くだりましまして、あそび給ふ所なり。たはやすく来たれる罪だにもあり。いはんや、そこばくの年月撫でおほしたてゝ、萬劫の罪ほろぼさむ、あしきさまのがれむとて、まかりこづくれるを、おのが一分のとくなし。なにによりてかなむぢが一分あたらむ」といひて、たゞ今食まむとする時に、大空かいくらがりて車の輪のごとくなる雨ふり、いかづちなりひらめきて、竜に乗れる童、黄金の札を阿修羅にとらせてのぼりぬ。札を見ればかけるこも「三分の木のしものしなは日本の衆生俊蔭に施す」と書けり。阿修羅

おほきに驚ろきて俊蔭をなゝたびふし拝み「あなたふと。天女の行末の子にこそおはしけれ」と尊びていはく、「この木の上中のしなは大福徳の木なり。一寸をもちてむなしき土をたゝくに、一万恒河沙の宝をいづべき木なり。しものしなは声をもちてなむながき宝となるべき」といひて、阿修羅木をとりいでて、わりこづくるひゞきに、天稚御子くだりましまして琴三十つくりてのぼり給ひぬ。かくてすなはち音声楽して天女くだりましまして、うるし塗りたなばたに緒よりすげさせてのぼりぬ。

〔口訳〕 阿修羅は、いよいよますます怒って言うには、「お前が先祖代々受けついで来た命を、たとえたち切るとしても、この木は一寸もお前のものとすることは出来ない。なぜなら、この世の父母が成仏なさった日に、天上の童子がお降りになって、三年かかって掘った谷に、天女が降ってきて音声楽を奏して植えた木なのだ。それでつまり天女がおっしゃるには、『この木は、阿修羅の、何万年もかからねば消えない大罪が半分消えた時に、この山から西の方にさし出た枝が枯れるだろうよ。その時にこの木を倒して三つに分けて、上の部分を三宝を始めとして忉利天までに供養をおよぼそう。まん中の部分は前世の親に差上げ、下の部分は未来の子孫に与えよう』とおっしゃった木なのだ。そして阿修羅をこの山の番人となさって、春は花園となり秋は紅葉の林となるここに、天女が自身お降りになってお遊びになる所なのだ。こういう所にやすやすと踏みこんで来た罪すらある。まして、何年もの長い年月大切に育てて、漠大な罪を消そう、罪業の深い悪いこの身を逃れたいと思って、ここへ来てこうして木造っていても、自分としてはこの木の一部分もわが物とは出来ない。それなのに、一体何の理由でお前が一部分でも受けられようか」と言って、阿修羅は今にも俊蔭を食べてしまおうとする時に、俄かに大空が暗くなり、車輪のようなひどい大雨となり、雷が鳴り稲妻が光って、その中から竜に乗った童子が来て、金の札を阿修羅に渡して天に上った。その札を見ると、書いてあることは、「三つに分けた木の下の部分は日本国の民俊蔭に恵み与える」と書いてある。阿修羅はたいへんに驚いて俊蔭を七度礼拝し「ああもったいない。天女の御子孫であられたのだ」と尊敬して言うには、「この木の上中の部分は大きな福徳を持っている木です。その一寸でもって何もない土地をたたくと、ガンジス河の砂のように無数の宝を出すことの出来る木です。下の部分は、よい音を出すという点で永遠の宝物ともなるはずです」と言って、阿修羅が木をとって割り木造る響に応じて、天稚御子がお降りになって、琴を三十造って天にお上りになった。こうしてすぐ音声楽を伴奏として天女が降っておいでになり、漆を塗り、機織女に糸をよらせ琴に張らせて天にのぼられた。

註　音声楽――雅楽の伴奏のことかという。
三宝――仏・法・僧のこと。この三は尊貴すべきもの故、宝というと。
忉利天――帝釈天王の居所。この天上の人はつねに長寿を得て遊戯娯楽するという。

六、不思議なすぐれた二つの琴と天人の降下。

かくて三十の琴を造りて、俊蔭、この林より、西にあたれる栴檀の林に移ろひて、この琴の音を試みむとて、いでたつほどに、つじ風出で来て三十の琴を送る。そこにて音を試みるに、二十八は同じ声なり。なかばを二につくれるは、山くづれ地われさけて、なな山一つにゆすりあふ。

俊蔭、清く涼しき林にひとり詠めて、琴の音をある限りかきたててあそぶに、三年といふ年の春、この山より西に当る花園に移りて、琴どもならべおきて、大きなる花の木のかげに宿りて、わが国のこと、父母のこと思ひやりつつ、声まさりたる二つの琴を試みるに、春の日のどかなるに、山を見れば霞みどりに、林を見れば木の芽けぶりて、花盛りに面白く、照る日の午の時ばかりに、琴の音をかきいでて声ふりたててあそぶ時に、大空に音声楽して、紫の雲に乗れる天人、七人つれてくだり給ふ。俊蔭ふし拝みてなほあそぶ。天人花の上におりゐてのたまふ。「あはれ何ぞの人か。春は花を見、秋はもみぢを見るとて、われらが通ふ所なれば、飛ぶ鳥だに通はぬに、たよりなき住ひはする。もしこれより東に阿修羅が預かりし木得給ひし人か」とのたまふ。俊蔭「その木たまはれる衆生なり。かく仏の通ひ給ふ所ともしらで、しめやかなる所となむ思ひて、年ごろ籠り侍る」と答ふ。天女のいはく「さらば、われらが思ふ所ある人なれば、住み給ふなりけり。天の掟ありて、あめのしたに琴ひきて族たつべき人になむありける。我は昔いささかなる犯しありて、ここより西、仏の御国よりは東なる所にくだりて七とせありて、そこに我子七人とまりにき。その人は極楽浄土の楽に琴をひきあはせてあそぶ人なり。そこに渡りて、その人の手をひきとりて、日本へは帰り給へ。この三十の琴の中に声まさりたるをばわれ名づく。一つをばなん風とつく。一つをばはし風とつく。この二つの琴をばかの山の人の前にてばかり調べて、また人に聞かすな」とのたまふ。「この二つの琴の音せん所には、娑婆世界なりとも必らずとぶらはむ」とのたまふ。

〔口訳〕こうして三十の琴を造って、俊蔭は、この阿修羅の林から、西にあたっている梅檀の林に移って、この琴の音をためそうと思って、そこから出立する時に、つむじ風が急に起って三十の琴を梅檀の林に送った。そこでその林に来て琴の音をためすと、二十八は同じ音である。中央を二つに造った琴を弾くと、実に驚くべきことに、山はくずれ地はわれさけて、七つの山が一しょになって鳴動する。

俊蔭は、清くすがすがしい林にひとり歌をうたいながら、琴の音をある限りかき鳴らして音楽をして日を過していたが、三年たった年の春この山から西にあたる花園に移って、琴などを並べておいて、大きな花の木のかげにいて、自分の本国のことや父母のことを思いやりながら、例の特別に声のすぐれた二つの琴を弾いてみると、折から春の日はのどかなところに、山を見ると霞はみどり色にたなびき、林を見ると木の芽がけぶるように芽吹いて、花は今を盛りと美しく、日の照っている正午ごろに琴の音を鳴らし声をあげてあそんでいると、その時、大空に音声楽が聞えて紫の雲に乗った天人が七人連れだっておくだりになった。俊蔭は驚いて礼拝してなおも音楽を続ける。すると天人は花の上におりて来ていておっしゃる。「ああ、あなたはどういう人か。春は花を見、秋は紅葉を見るといって私たちが通って来る所だから、ここは飛ぶ鳥さえ来ないのに、さびしく住んでいるのですか。若しやここから東に阿修羅が管理している木を収得なさった人ですか」とおっしゃる。俊蔭は、「その木を頂戴した者でございます。このように仏天人の通っていらっしゃる所とも知らないで、静かなよい所だとばかり思って年来ここに籠っておりましたのです」と答える。天女のいうには、「それでは私たちの考えるところのある人だから、こうして住んでいらしたのです。天のとりきめがあって、あなたは天下に琴をひいて一家をなすべき人であったのですよ。私は昔ちょっとした罪を犯して、ここから西で仏の御国からは東にあたる所にくだって七年過し、そこに私の子が七人住みつきました。その人たちは極楽浄土の音楽に琴を合奏させる人です。そこへ行って、その人の奏法を弾き覚えて、日本へはお帰りなさい。また、この三十の琴の中で音のすぐれている二つの琴に私は名をつけます。一つの琴を、なん風とつけます。もう一つのを、はし風とつけます。この二つの琴をあの山の人の前でだけ弾き、外の人には聞かせてはいけません」とおっしゃる。そして「この二つの琴の音のする所には、たとえ娑婆(しゃば)世界であろうと、きっとたずねましょう」とおっしゃる。

註　娑婆世界――「娑婆」は堪忍の意。三千大千世界。この世、現世のこと。

七、俊蔭、天女の言に従い七仙人をたずねる。

俊蔭、天女ののたまふに従ひて花園より西をさして行けば、大いなる川あり。その川より孔雀いできて、その川を渡しつ。琴をば例のつじ風送る。それより西へ行けば谷あり。その谷より竜いで来て越しつ。琴はつじ風送りつ。それより西をなほ行けば、さかしき山七つあり。その山より仙人いでて越しつ。それより西を行けば虎狼ひと山さわぐ所あり。象出で来てその山を越しつ。それより西へ行けば、七の山に七の人ありて、いひしが如くに住む所にいたりぬ。一つといふ山をみれば、梅檀の木のかげに、林に花を折りしきて琴ひく人、年三十ばかりにてあり。俊蔭立ち居拝む。山のあるじ大きに驚きてこれは何ぞの人ぞ」。俊蔭答ふ。「清原の俊蔭、まゐり来つることは、しかじかなむのたまはせしかばなむ。」その時に山のあるじ「あはれ蓮花の花園のおのが親の通ひ給ふ所ありか。日の本の人なれど、花園よりと聞けば仏の通ひ給はんよりも尊く」とて同じ木のかげにすゑて事の由をくはしく問ひ給ふ。俊蔭始めよりの事をくはしく申す時に、つじ風例の琴どもをみな同じ如く置きつ。その時に山のあるじ、俊蔭が琴の音を試みて、かなしび給ひて、俊蔭とつらね給ひて二つといふ山に入り給ふ時に、その山のあるじ珍らしがり給ふ。客人の聞え給ふ。「あやしう蓮花の花園よりといふ人のありつれば、母の恩のかなしく乳房の恋しさになむゐて参りつる」との給へば、あるじはあはれがりて、三人つれて三つといふ山に入り給ふ。そこにも同じことのたまひて、四人つれて四つといふ山に入り給ふ。そこにも同じことのたまひて、五人つれて奥へ入り給ふ。そこにも同じことのたまひて、六人つれて奥へ入り給ふ。そこにも同じことの給ひて七人つれて入り給ふ。その山のさまは心ことなり。山の地は瑠璃なり。花を見ればにほひことに、紅葉を見れば色ことにほこりかに、浄土の楽の声風にまじりて近く聞え、花の上には孔雀つれて遊ぶ所に、七人つれて入り給ひてその山のあるじを拝み給ふ。

〔**口訳**〕俊蔭は天女のおっしゃるとおりに花園から西をさして行くと、大きな川がある。その川から孔雀が出て来て俊蔭を渡してくれた。琴の方は例のようにつむじ風が運ぶ。それからもっと西へ行くと谷がある。その谷から竜が出て来て俊蔭を越えさせた。琴はまたつむじ風が吹送った。それから西へもっと行くと、けわしい山が七つある。その山から仙人が出て来てまた

無事に越えた。その山から西の方に行くと虎や狼が山中に騒いでいる所がある。しかし象が出て来てその山を越えた。それから西へ行くと、七つの山に七人の人がいて、あの天女が言ったとおりに住んでいる所に着いた。第一の山を見ると、林の中で梅檀の木のかげに、花を折って敷きその上で琴を弾く人がいて年は三十ばかりである。俊蔭は立って拝み坐って拝む。山の主は大層驚いて「これはどういう人か」と言う。俊蔭は答える。「清原の俊蔭です。ここへ参りました次第は、天女がこうこう仰せられたからでございます」と。そうすると山の主は「ああそれでは、蓮花の花園の、私の母親がお通いになる所から来られたのですか。日本の人らしいが、あの花園からと聞くと仏のおいで下さるよりも尊く思われて」と言って同じ木のかげに俊蔭を坐らせて事の次第をくわしくお聞きになる。そこで俊蔭は始めからのことをこまかに申しあげている時に、つむじ風がまた例の多くの琴をみんな運んで来て同じようにそこに置いた。その時に山の主は俊蔭の琴の音をためして、その音に感激なさって、俊蔭と連れだって第二の山にお入りになると、その山の主はそれを迎えて珍客だとお思いになった。客人が申されるには珍らしくも蓮花の花園から来たという人がありましたので、母の恩愛が慕わしく母の乳房の恋しいあまりに連れて参りました」とおっしゃると、主人は大層感動して、三人連れだって第三の山にお入りになる。そこでも同じことをおっしゃって四人連れだって第四の山にお入りになる。またそこでも同じことをおっしゃって五人連れだってさらに奥へお入りになる。そこでも同じことをおっしゃって六人連れだってまた奥へお入りになる。そこでも同じことをおっしゃって七人連れだってさらに入って行かれる。その第七の山のようすは特別である。山の地肌は瑠璃である。花を見ると香りが格別で、紅葉を見ると色がとくに美しく、極楽浄土の音楽の音が風にまざって近く聞え、花の上には孔雀が連れだって遊んでいる、そういう所に七人が連れだってお入りになって、その山の主をお拝みになった。

〔附説〕 このあと、俊蔭はこの山で七仙人とともに琴の秘曲を奏でる。そこへ仏が雲の輿に乗って下り、浄土の楽と響きあってすばらしい音楽となる。こうしてやがて俊蔭は帰朝する。俊蔭の得た琴の秘曲は、天女の予言のとおり、子や孫に伝えられてゆく。本号で俊蔭の漂流譚を終えることにする。次は仲忠の孝養譚にうつる予定である。